

# 雲天通信

発行=雲天女の会 949-6553 新潟県南魚沼市清水 小野塚忠男方 tel:0257-82-3473 fax:0257-82-4581

## 「雲天から」

### 近況報告

小野塚 和彦

巻機は、例年になく紅葉が早いようで彼岸ころから赤く色づき始めていました。

今、キノコの盛りを迎え、じいちゃんも私も毎日ワクワクしながら忙しい日を過ごしています。九月下旬からじいちゃんの舞茸とブナハリタケが出はじめ、アマンドレ(なら茸)がキノコの木や雑木林に一斉に出てきました。雲天通信の寄稿を作成中にナメコも始まり、慌てています。



アマンドレ

今年の春から雲天に戻り、ようやく雲天の設備の更新に取り掛かりました。建築後二十五年で建物の外装、設備関係の修繕や交換が

必要になってきています。以前から冬季には、床下に浸水がありました。湿気から床が風邪を引いたようになり、大工さんに相談したところ、床より外からの浸水を止めなければ何をやってもおなじとアドバイスをもらいました。雲天の建設にあたった高橋建設さんにとりあえず南側に暗渠排水路の敷設してもらいました。今後、雨水など表層水を流すため、庭先を舗装予定です。



排水路工事

高橋建設さんには冬囲いも綺麗に外してもらいましたので建設当時の外観になっています。

夏にメインボイラーとタンク水を二階に上げるための加圧ポンプが故障したことから入れ替えました。また最も不安な設備は、水道水の井戸と消雪用の井戸で、これまでメンテナンスなどをしてきていませんでした。またすでに敷

設から二十年位になることから戸の洗浄とポンプの入れ替えを準備中で、十月中に完了予定です。また、玄関前の屋根も錆が出始めていたことから塗装しました。来年は本体の屋根塗装が必要とのこと。

こうして、故障や老朽化した設備の更新、メンテナンスを行いながら、営業しています。

営業自体は、八月後半の雨天続きからもう一つといったところですが、九月に入り団体ツアーが入るなど忙しくなってきました。

じいちゃんは、年齢どおりの体になってきていますが、毎日舞茸とブナハリタケの収穫に忙しく働いています。

これから、紅葉シーズンですから忙しくなります。

## 最近のイベントと料理

小野塚 奈穂子

会員の皆さん、いつも有難うございます。あけびが実り、巻機山の山頂は九月中旬から紅葉が始まっています。

八月中旬の台風の後涼しくなつて雨の日が続きました。九月の残暑は、あまり感じることなく過ぎました。今年秋が早いです。

雲天の様子をご報告します。

昨年春の予約のほとんどが、ばーちゃんの偲ぶ会でT.W.Vの皆さんでした。今年も、ホームページを見ての予約も増えてきました。夏は、毎年来て下さる合宿を今年

も来ていただき、にぎやかにしてもらいました。

また、「昔よく行ったけど、まだやっていますか」と確認され、昼食の予約を入れてくださる方もありました。

昼食は、ばあちゃんのやっていた時の料金から、もっと利用しやすい三千円に引き上げています。以前の料金で来て下さった方々は、「せっかくなのだから季節の山菜を十分に楽しみたい」と要望され、「三千円から」と修正して、予約の時に希望を伺ってからのコースを決めることにしました。昼食では、春も秋も天ぷらとソバは人気があります。

八月には、T.W.Vの山小屋ができてから五十年という記念祭の前夜祭で百人超という方が集まりました。亡くなったばあちゃんも「賑やかでいい日だ」と言っているような気がします。



百人を超える食事

## 「八海山を飲む会」

七月に清酒「八海山」の営業の高野さんという女性の方が、「何度も巻機山に来ていて、雲天の前を何度も通った。一度来てみたかった。」と、女子力で南魚沼を良くしようとするメンバーで夕食を食べに来て下さいました。景色の見える部屋で山菜料理を食べてもらったところ、とっても喜んでもらい、「もっと皆さんに広めませんか、八海山の酒の会をしませんか」との提案をいただきました。そして、九月上旬に二十四名の方の参加を得て、初めて酒の会が開催されました。

特別吟醸酒や八海山の地ビールを飲みながら、高橋建設の社長さんから雲天の建設にまつわる話をしていただきました。またじいちゃん弟の一人で見附市に住む叔父さんから日本一になったことのある詩吟を披露してもらい、美味しいお酒と詩吟が座敷に響いて宴会がもりあがりました。

この時の料理は、秋のナメコ、菊の胡麻和え、ズイキ、ケンチン汁、デザートはイチジクにしました。

この企画にT W Vから遠山先生が、巻機登山を兼ねて参加してくださいました。地元からは、新潟砂利の会長さんや綺麗な着物で花を添えてくださった山田織物の奥様、新潟日報の支局長さん、市会議員さん方など名士が集まって素晴らしい会になりました。

## 「最近のお客様とおもてなしの様子」

九月に入り、足の遠のいていた山の団体ツアーのお客さんが入り始めました。例年九月は予約が少ない時期なのですが、名古屋の旅行会社が十回入っ

てくれたり、東京の山の会も十数名の団体でおいで頂いたり、早稲田のハイキングクラブのOB会を開いてもらったりと九月は忙しく過ぎていきます。

父ちゃんは、昔から舞茸採りが好きで単身赴任の時でも夏休みを九月にずらして山に行っていました。今年は初日に大きな舞茸を採ってきました。丁度、お客さんがある日で、天然の舞茸を見たことがないというので、お見せしたところ、歓声をあげていました。初めて来られた二組のお客さんでしたが、囲炉裏で父ちゃんと舞茸話で二次会を開き盛り上がっていました。

父ちゃんが囲炉裏で世話をして、メニューや予約の相談、登山ルートの話などをしてくれ、お客さんから喜ばれています。私一人では囲炉裏端まで手が回らなかつたのですが、父ちゃんが担当してくれるようになり、これから雲天の魅力になって行くと思っております。

## 「料理の様子」

今、料理はじいちゃんが作っている舞茸とブナハリタケが最盛期です。ブナハリタケは、炒めて醤油味にして大根菜や茗荷を添えて出します。秋のケンチン汁も美味しいですが、じいちゃんの舞茸を食べてもらいたいので舞茸汁にしています。

この時季は、例年菊の胡麻和えを出していますが、雨が多く菊が不作のことでしたから魚沼の胡麻なますに代えたりしています。

春からデザートも揃えるようにしています。春はカボチャの羊羹、夏は紫蘇ジュースを作ってゼリーにしてみました。



マイタケ

したが、気温が高いと溶けるので寒天にしました。秋では、イチジクは甘さをひかえて煮て出しています。イチジクに赤ワインにシナモンスティックを入れてみたり、白ワインと砂糖で煮たり、色々試しています。イチジクは量の確保やコスト的に割高ですが、女性の方々には喜んで貰っています。

会員の皆さん、秋のキノコの良い時期にどうぞいらしてください。囲炉裏でじいちゃんと懐かしい話をしてください。また私共に沢山の意見をお聞かせください。家族みんなでお待ちしています。

## 追記「かぐら南蛮」

小野塚和彦

南魚沼から長岡三条にかけ、夏場に外見はピーマンそっくりの「かぐら南蛮」という特産物が作られ、野菜市にも販売されています。昔からの食べ物で夏にナスの油味噌炒めに入れたりして食べられてきたものです。南蛮というだけあって辛く、ビールが進むし、

ご飯の友にも良いたべものです。私は、九月二十日山の様子を見に行つて天然舞茸にあたり、意気揚々帰ってきました。その日の夜のこと。群馬県から来たという三人のグループは巻機を下山してからチェックインして、午後三時ころからビールを飲み始めました。

途端に「わー辛い、口が燃える」と大騒ぎになりました。一番の若者が囲炉裏の私のところへやってきて、

「何でピーマンなんかだすのかと思つていた。一口でかぶりついたら口中が火事なつた」と半分抗議をこめて訴えてきました。奈穂子かあちゃんが付け出しにと煮ておいた「かぐら南蛮の甘辛煮」を出したのです。

私は、笑いながら「かぐらなんばん」というご当地名物であること。辛いが慣れてくるとまた食べたくなること。味噌や油、ナスや玉ねぎと相性がよく、夏の特産品であること、などを説明したところ、ニコニコしながら飲みなおしていました。

今度は母ちゃんが「かぐら南蛮」を素揚げにして天ぷらと一緒に出したところ、「わーまた出た」と大騒ぎしながら「辛い、口が痛い」と悲鳴を上げ、ビールを追加しながら宴会となりました。

このグループは、運ぶ料理が間に合わないほどよく食べてくれ、予約してくれた経緯を尋ねたところ

「山に登った後、地元の民宿に泊まれば、丁度季節のキノコでも出してくれると思つて来ました。来て正解だった。キノコがいっぱい出た」と喜んで

いましたので、採れたての舞茸を見せたら更に大喜びでした。  
 あんまり喜んでくれるので、囲炉裏に移ってから舞茸のホイール焼きをサービスしたところ、さらに大喜びして宴会が盛り上がり、結局八時間飲み続けたという近頃珍しいグループが来てくれました。  
 足が速い人たちで、六時間ほどで巻機を往復してきました。

**友の会の総括について**

**会長 玉木 強**

みのりの秋を迎え、先日も新幹線の窓から魚沼地区の稲穂の波を見て「この夏も酷暑だったが、お米の出来はどうかな」などとつぶやきながら、頭の中では雲天のキノコ汁や山菜を前に新米の丼を手に行っているイメージを描いていました

友の会も二十五期となり、今期を以て清算し区切りをつけ、何らかのかたちで再出発する方向で検討中です。私も五十余年のお付き合いですが、超後期高齢者ゆえ、年に何度も伺うことが難しくなってきました。県内在住と云うことで名ばかりの会長ではありませんが、今期で退任させて頂きます。  
 新生友の会の発展を祈念いたします。

**友の会の二十五周年を振り返って**

**理事長 三田 育雄**

友の会の発足

友の会は、平成二年三月に“雲天新宅後援会”という名称で発足しました。当時、南魚沼地域は新潟日報の「東京都湯沢町」(昭和六十三年十二月)で特集されたようなバブルまっただ中でした。清水でも大手不動産会社による巻機山の大规模スキー場開発計画が発表され(平成二年六月)、集落の中が大揺れに揺れる中で、雲天が一人敢然として反対表明した時代でした。



巻機山大規模スキー場開発計画

そんな時期に、雲天の遠い親戚筋にあたる在の旧家が取り壊しになるという話が舞い込んで来て、雲天ではそれまで長い間くすぶり続けていた新しい家造りの夢が一気に沸き上がってきた。来るお客さんたちに相談を持ちかけながら気持ち固めていったようです。  
 しかし、旧家の解体・移築はことのほか費用がかかり、雲天に重くのしかかっていたようでした。

ところが、雲天のお客さんの中には、前述のスキー場問題で信念を貫いた姿勢に支持、共感して、新しい家造りを応援するという申し入れが少なくありませんでした。そこで、平成二年二月に、雲天の主だった客筋であった新潟県、群馬県の山岳会関係者、東大ワンゲルOB会のメンバーが集まって発起人会を開き、組織的に応援するための相談をし、三月十日に後援会の入会呼びかけを開始しました。

当時は、電子メールなどは普及していなかったので、専ら、郵便とファックスによる呼びかけでしたが、反応は鋭く、三月二十一名、四月百四十九名、五月七十九名と、毎日何件もの申込書が殺到し、深夜まで対応に追われる日々が続きました。

**雲天新宅の建設と営業を応援して下さい**

【こんな新宅の音声が聞こえています】  
 すでにご存知の方もいらっしゃると思いますが、清水の雲天では昨年の初冬から新宅の建設を進めております。コンクリート造の1階の上に六日町の在の豪農の家をのせた総2階づくりで、延べ床面積約190坪、定員56名という規模のものです。設計と監理は水野一郎氏(東大ワンゲルフォーゲル部の山小屋の設計者、現金沢工業大学教授)が専任的に引受けてくれています。施工は地元湯沢町の高橋建設です。この夏には、雲天が30年来求め続けてきた、清水の地にとっしりと根をおろした、私たちの心のふるさととなる新宅が誕生する予定です。



新宅後援会の呼びかけパンフレット

最終的に、三百八十名の入会があり、四千三百万円を超える出資を得ることができ、雲天には一部寄付も含めて三

千八百万円を融資することができました(残金の五百万円余りは会の運営原資)。なお、会員の地理的な分布は、東京一四二、神奈川六五、新潟六一、千葉四一、埼玉三十などでした。  
 そして、新宅は平成二年七月末に竣工し、八月一日に晴れて営業を始めることができました。

**開業後の動向**

(その一、平成十二年以前)

開業後の関心事はお客さんの入り具合と反応ですが、幸いなことに、旧家を改築した宿というところで評判になり、名物かあちゃんのおわさ(「女たちは」世紀を「岩波書店」"Cloue E."週刊文春など)と相まって、お客さんは順調に増えて行きました。  
 ちなみに、平成十年少し前が宿泊客のピークで、年間二千人近く、年商が二千万円超という業績を上げていました。

したがって宣伝活動はほとんどしませんでした。山村で信念を持って生きる雲天の存在をきちんと記録に残すとともに、多くの人々にも知っていただくために、豊田和弘さん(お願いして「ひとりぼっちの叛乱」(平成八年、山と溪谷社)の発行を企画、支援しました)。

なお、会としては会員サービスに、当初、年一回の総会以外に、秋に会員サービスの目を設けたり、会員のために歩くスキーを備えたりしましたが、ニーズはきわめて低く途中で打ち切りとなりましたが、年二回発行の会報「雲天通信」は唯一存続し、四十を超える号数を重ねてきました。



初期の時代の総会

**総会報告**

**事務局局長**

**井上進二**

去る七月六日に雲天友の会総会を開催しました。以下の通り、内容および結果をご報告申し上げます。

- 一、日時：二〇一四年七月六日（日）  
午前十時～十二時
- 二、出席者：玉木会長、三田理事長、  
他会員の皆さま
- 三、報告・提案・了承事項

① 事務局より、本年度前半に会員の皆様全員に出資金残額のご報告と返済方法（含むクーポンへの変更、お祝い金への振替）のご希望につきお伺いした内容を集計し雲天さんともご相談した結果、ご回答いただいた方には、ご希望通りの返済等の処理を行ない、ご回答いただけなかった方にも、ゆうちょ銀行の払出証書にて残額から証書発行手数料と郵送料を差し引いた額を返

済できる目処がたったことを報告した。但し、返済額合計が千円に満たない場合は、証書発行手数料と郵送料を差し引くとほとんど残額が残らないので、郵便切手かクーポンを代わりにお送りすることもあり得る旨、事務局より補足した。討議の結果、本件は了承された。

② 事務局より、会員の皆様全員分の出資金残額の処理（返済、クーポン振替、お祝い金拠出）は、来年早々から手続きに入り、三月いっぱいには完了する計画であることが説明された。討議の結果、本件は了承された。

③ 引き続き、事務局より、その作業が終了した時点で、出資団体としての当会は解散したい。但し、当会の会計は清算業務のために来年度（二〇一五年度）に限ってもう一期残すこととしたい旨提案があった。討議の結果、本件は了承された。

四、その他討議事項  
引き続き総会は自由討議に入り、以下のことが討議された。

- ・新たな雲天の応援団の立ち上げを望まれる声も多く、雲天新世代と相談しながら全く新しい会を創設して、その会が雲天を引き続き応援していく母体として再出発することが討議された。雲天の若夫婦から、「雲天のブレインまたは応援団」として存続してほしいという強い要請があった。
- ・新しい会の運営については、雲天若夫婦とも相談の上、現在の世話役よりもずっと若い世代の手に委ねるような形にして行きたいという意見が出された。

**雲天通信を振り返る**

（その一 創刊号～第二十二号まで）

**事務局（機関紙）**

**土田晃道**

**鈴木太平**

雲天通信は一九九〇年十二月一日発行の創刊号以来、今回で第四十三号を数える。その間、多くの編集者が情熱を傾け、その熱い想いを次世代に引き継いできた。我々は第三十五号（二〇一〇年十月十六日）から担当しているが、これまでの通信をひもとき歴史を振り返ってみたい。

創刊号は「雲天『豪農の館』でスタート」のタイトルのもと、前所有者の廣田氏、設計者の水野氏、工事を担当された高橋氏、そして父ちゃんが夫々の想いを寄稿された。新宅の手書きの平面図も入っていて大変楽しい紙面になっている。その通信の発刊を提案し、そして長期にわたって編集を引き受けて下さったのが、元会員で、雑誌編集者でもあり、小説家の山中公男氏であった。題字の作成や紙面のデザインも山中氏によるものであった。

第三号～第八号（一九九二年一月～一九九四年九月）には雲天史（回想放談）が連載された。常連の皆様の数十年に亘る雲天とのお付き合い、エピソードが興味深い。

和彦さんの初めての寄稿が第六号（一九九三年七月）で、タイトルは「雲天新宅植林計画」であった。

奈穂子さんは第十二号（一九九六年十月）の「はじめまして若カアチャンです」でデビューされた。丁度岳くん

が誕生した年であった。綾ちゃんは第九号の「綾の夢」で、恵ちゃんも第二十号（二〇〇三年三月）の「巻機の自然を守るう」でそれぞれデビューした。二人とも小学一年生であったが大変良い文章だ。

雲天新宅十周年を祝う会（二〇〇〇年八月）の情景は同年十二月の第十六号に生き生きと掲載されている。

雲天通信のトップ記事には父ちゃん、母ちゃん、和彦さん、奈穂子さん、桂子さん、透さんの雲天ファミリーの投稿が多いのだが、一方で「巻機山景観保全、私と清水の出会い、北越雪譜と清水」等の寄稿も見られ、紙面が益々多様化してきた。

雲天では秋季会員の日、夏休みや正月などの機会に様々な催し物が行われてきた。「バイオリン、声楽、和太鼓等の音楽祭」、「正月炬燵発句会」、「警察航空と山岳救助、美味しいコシヒカリの作り方等のユニークな講演会」等の様子が、その都度雲天通信に掲載されて彩りを添えてきた。

一九九〇年から二〇〇四年（二十一号）迄の十四年間は大勢のお客様を迎え、まさに黄金の日々であったことが窺える。（次号に続く）

■次号は来年四月発行予定です。最終号となりますので会員の皆様からの寄稿を歓迎いたします。左記にお寄せ下さい。

世田谷区桜丘 4-1-3-30  
 FAX 03-3420-3446  
 Eメール j\_mita@nifty.com

三田育雄